

書 評

Thomas Böhm :

*Theoria-Unendlichkeit-Aufstieg :*

*Philosophische Implikationen zu De Vita Moysis von Gregor von Nyssa*

E. J. Brill, Leiden, 1996, pp. xii+348.

秋 山 学

ニュッサのグレゴリオス研究は近年、新しい視点を軸にした多彩な成果を産み、隆盛を極めている。J. Daniélou (1944; 以下年号のみの指示は主著の刊行年) や W. Jaeger (1954) といった亡き大家の著作は今や古典となり、1969 年以降ほぼ 4 年ごとに開催されているグレゴリオス・コロキウムでは、グレゴリオスの主要著作が順次取り上げられるとともに、多角的なテーマが設定されている。1988 年には M. Altenburger/F. Mann, *Bibliographie zu Gregor von Nyssa* (Leiden) が刊行されて研究史の通覧が容易となったが、それと相前後して、ドイツでは Mainz の A. Spira (1966) の下に、H. R. Drobner (1982) や Ch. Klock (1987) などによる修辞技法・古典学的研究の成果が公にされるようになった。この傾向は H. M. Meissner による修辞学・神学的研究 *Rhetorik und Theologie : Der Dialog Gregors von Nyssa De Anima et Resurrectione* (Frankfurt 1991) において、神学的観点との総合へと向かっている。一方 E. Mühlenberg (1966) による概念史・哲学史的研究の系統としては、R. J. Kees による *Die Lehre von der Oikonomia Gottes in der Oratio catechetica Gregors von Nyssa* (Leiden 1995) が新しい。他に聖書解釈学の領域では F. Dünzl による *Bräut und Brautigam : Die Auslegung des Canticum durch Gregor von Nyssa* (Tübingen 1993) が規範的である。

ここに取り上げる Th. Böhm の著書は、ドイツにおける以上のような蓄積を踏まえ、さらに古代末期哲学の権威 W. Beierwaltes の研究を基に、R. M. Hübnér (1974) を中心とした伝統的教理史・教義学的研究、あるいは司牧学との連携のうちになされた

文化的「使用」をめぐる研究 (Ch. Gnllka, *CHRESIS: Die Methode der Kirchenväter im Umgang mit der antiken Kultur*, Basel/Stuttgart 1984) の流れをも汲んだもので、今世紀におけるグレゴリオス研究を包括する総合的な成果だと言える。副題から知られるように『モーセの生涯』を軸に据えてはいるが、『エウノミオス駁論』や『雅歌講話』との関連にも論じ進むことで、グレゴリオスの全体像解明にも寄与するものとなっている。主題の一部である Implikation の語は、主として『モーセの生涯』におけるグレゴリオスの思想が、様々な哲学的問題をめぐり、古代哲学史の延長においていかなる位置に置かれるかを意味するものである。

全体の内容を概観しよう。第Ⅰ部「序文」に続き、第Ⅱ部では『モーセの生涯』序文に関して修辞技法的考察が行われる。続く第Ⅲ部「『モーセの生涯』における哲学的含意 (Implikation)」は全体の主部を構成する。その成果を踏まえ、第Ⅳ部「(モーセへの) 三度の神顕に関する考察」では、「燃える芝」(Ex. 3. 2), 「闇」(Ex. 20. 21), 「岩の裂け目」(Ex. 33. 22) 各々の場面で神の顕現に遭遇したモーセの体験の意味が神学的に解明される。第Ⅴ部「展望」では全体の総括と課題が提示される。

そのうち分量的にも本書の核を形成する第Ⅲ部は、全6章から成る。章題は1 グレゴリオスにおける観想と神秘思想 2 「観想」および「無限性」の結合 3 「無限性」概念の哲学的含意 4 グレゴリオスにおける「無限性」概念の意味 5 アレゴリー-的聖書解釈の意味づけ 6 総括 となっている。第Ⅲ部におけるキーワードは 'Theoria', 'Mystik', 'Unendlichkeit', 'Allegoria' そして 'Gnade' などであり、特に第5章が白眉である。

著者はまず、H. Dörrie による *Reallexikon für Antike und Christentum* の項目記事 (1983) に立脚し、グレゴリオス研究の問題点を①聖書解釈 (アレゴリー) ②教理史 (エウノミオスとの関係) ③哲学史的背景 (homoiōsis など) として整理する (S. 10)。以降、著者の記述はこの3点を軸に進められてゆく。特色ある視座として挙げられるのは、「使用」の観点、哲学史的概念考察、エウノミオス論争との関連、聖書解釈学のもつ神学的次元、そして「恩寵」論などである。以下、これらを基に著者の叙述を追ってみることにしたい。

まず上にも挙げた「使用」の観点についてであるが、著者は Gnllka, Meissner の研究を受け継ぎ、「正しき使用」*usus iustus* の概念を全体の出発点として立てる。グレゴリオスが哲学的知の伝承を活用する ('chrēsis'; *VM.* 68. 16 Musurillo) のは、「神

秘の神殿が理性的富によって、時に適い美しく飾られる ('kallôpisthênai'; VM. 68. 18) ため」であり、この姿勢は所謂「出エジプトの原則」(cf. Ex. 12. 35) による (S. 28)。異教の教養は、単に外的な添え物・装飾のために役立てられるだけでなく、信と教会のうちに内包される真理の伝達 *Darstellung* に貢献する (S. 239)。この点で Böhm は Gnilka を忠実に継承している (cf. Gnilka, *op. cit.* 79)。

前半部では、Platon, Aristoteles, Plotinus の他, Parmenides, Alkinous や Proclus ら哲学者の原典とグレゴリオスの記述とが丹念に比較対照される (S. 80ff.)。その途上、たとえば「無限性」をめぐる考察ではプラトン『パルメニデス』との関係が論じられるが、さらにグレゴリオスの論がパルメニデス自身に遡るかどうかという問題については、パルメニデスには分有、像、類似といった観点が見当たらないことから、むしろプロティノスに帰着するものだと結論づけられる (S. 244ff.)。

このような形で古代哲学からの影響関係について語られる中で、人間が神と合一し神認識を果たしうるとする古代哲学の主張に対しては、グレゴリオスは人間の有限性と神の無限性とを強調することによって、それらを「絶えざる探究」(epektasis) のうちに置き直したという見解が強調される (S. 199ff.)。この探究が成立しうるのも、人間が「神の像」*eikôn* として創造されたこと (Gen. 1. 26) によるものであり、それは専ら神の側からの「恩寵」(Gnade) に基づく行為なのである (S. 209ff.)。新プラトン主義哲学からのグレゴリオスの乖離と内的変容が、どの次元においてなされているかを明らかにする著者の手法は緻密かつ明晰である。

人間の有限性と神の無限性という絶対的差異は、特に人間の「言葉」が有する限界性において顕在し (S. 177ff.)、ここに「分有」の観点が導入される。存在への分有という側面よりも、むしろグレゴリオスによれば、神の善性あるいは神的生活に与ることこそ困難な業である (S. 199ff.)。諸々の概念を扱う上で、「分有」については Balás (1966) の、「無限性」に関しては Mühlenberg (1966) の、そして「似像性」(*homoiôsis*) をめぐっては Merki (1952) の研究が踏まえられつつ、総じて「恩寵」の観点が強く打ち出されている点が特色であろう。

神による創造行為の中でその似像として作られた人間は、恩寵の下に、像とは異質な要素を自らより取り除いてゆくが (*aphairesis*)、この行為は絶えざる登攀、本来の姿への「帰還」であり、*aretê* に向かう *epektasis* として規定される (S. 206-8)。これは古代哲学における *homoiôsis* の恩寵論による変容であり (S. 210)、「存在」その

もの (Ex. 3. 14) である神の善性への「分有」としての意味を持ち、靈魂における感覚的なものからの離脱運動と位置づけられる (cf. モーセが履物を脱ぐ行為; Ex. 3. 5).

一方この過程は聖書解釈の中で、有限なる人間の言語によって隠された聖書の真の意味をめぐり、人間の言語の限界性を認めつつその覆いを取り除くこと (aphairesis) で明らかにしてゆく行為 (allêgoria) と軌を一にする。人間の持つ限界性は、聖書解釈におけるアレゴリーの正当性の証左となる (S. 212ff.). この解釈学的営為は、グレゴリオス自身が『モーセの生涯』第二部で提示するように theôria として成立し、その絶えざる継続が homoiôsis として措定される。こうして倫理学と解釈学とを包括する視点が構成され、その実際が「三度の神蹟」において検証される (S. 235ff.).

このほか教理史的側面、すなわちアレイオス論争をめぐる諸問題に関しても、Iamblichus, Proclus, Syrianus らとの連関において捉えられる (S. 107ff.). 第III部 2, 2では、『エウノミオス駁論』および『モーセの生涯』『雅歌講話』を通して「無限性」をめぐる論が認められることから、三著作の成立年代の関係が推察される (S. 137ff.). しかし後二著作では、すでにエウノミオス論争で議論されたテーマについては取り上げられていない。従って『モーセの生涯』および『雅歌講話』はアレイオス論争に関わるものではないという結論が下される (S. 147).

ギリシア教父学、特にニュッサのグレゴリオス研究は、広く様々な異文化伝統との対話においてキリスト教の今日的使命と可能性を探る試みのうちに置かれるものであろう。本書は「使用」の観点から出発し、古代哲学との精緻な比較検証においてこの課題への回答を試み、成功を収めていると言えよう。その中でグレゴリオスの立つ哲学史的背景と変容の次元が明らかにされるとともに、豊富な参照文献の指示によって独語圏を中心とする最新の水準が提示され、極めて有益な研究書となっている。今後のわれわれに課せられた課題として、語彙索引 Lexicon Gregorianum (1998~) の刊行に沿った精緻な語彙研究の推進と併せ、神学的問題としては、特に「使用」の観点か恩寵論と関係づけられる際にいかなる地平が披けてくるかを提示することを挙げておきたい。